

厳島神社：常盤御前の絵（絵馬の絵）

この江戸時代（1603～1868 年）の絵は、偉大な侍の英雄である源義経（1159～1189 年）の母親、常盤御前（1138～1180 年頃）が、敵対関係にあった平一族と源一族が争う中、息子を連れて雪の中を逃げている姿を描いたものです。この絵は信仰上の奉納品である絵馬として神社に奉納されました。

絵馬（「馬の絵」）という言葉は、一般的に願い事や祈願を書いて神道の神社や仏教の寺院に供える、奉納のための木の板のことを指します。しかし歴史的には、絵馬とは神道の神様が乗ると考えられていた馬の、絵やその他の描写のことでした。古代の日本においては、しばしば雨に関する祈願と関連して生きている馬が神社に寄進されました。実際の馬を寄贈するための手段を持っていたのは、政府などの機関や立場の強いコミュニティ、あるいは一部の個人のみが本物の馬を寄付しており、することが可能だったため、一般の人々は、代わりに粘土や木で形どったものを代わりに進呈しました。このやり方は、時代とともに強いコミュニティの人たちにも普及し(簡素化されていき)、それらは徐々にスケッチや絵画に取って代わられ、室町時代（1336～1573 年）までには絵馬のモチーフに馬だけでなく他の動物も加わり、さらに歌人や貴族、侍などの有名な個人も含まれるようになりました。裕福な信者は大きくて、しばしば手の込んだ絵馬などの芸術品を贈った一方で、他の人たちはずっと小さくて簡単な絵で済ませていました。それが発展して今日使われているような木の板になったのです。

厳島神社は何世紀にもわたって神社に贈られてきた数々の絵馬を大量に所蔵しています。それらの絵の中でも最も古いものは 1520 年までさかのぼり、12 世紀に京都から厳島に紹介された古代の芸能である舞楽が描かれています。